

明治期聖書訳語「よみ」に関する一考察

加藤 早苗

キーワード：地獄 黄泉 冥途 陰府 ヘボン訳

1 はじめに

死ぬことを他界するという。人は死して後、人間界を去って別の世界へ行くという考えから用いられる言葉である。諸宗教においても死後の世界は様々な形で描かれており、死語の世界に纏わる言葉には「来世」「あの世」「天国」「極楽」「浄土」「地獄」「奈落」「黄泉」「根の国」「根の堅洲国」「よもつくに」「冥府」「冥界」「異界」「霊界」「天界」「陰府」「冥途」「冥土」など多数存する。

1880（明治13）年に出版された聖書『新約全書』には死後の世界を表す言葉として「天国」「地獄」「^{よみ}陰府」という語が使用された⁽¹⁾。ギリシャ原典における「βασιλεια των ουρανων」[γεεννα(geenna)]「^{αδης}(hades)」の訳語である。日本で最初に刊行された聖書はゴープル訳（1871）『摩太福音書』であるが、ゴープルは「geenna」「hades」とともに「ちごく」と訳しており、『新約全書』に先立ち和訳されたヘボン訳（1872）『新約聖書馬可伝』、（1873）『新約聖書馬太伝』では「geenna」を「地獄」、「hades」を「^{よみち}冥途」「^{よみ}黄泉」と訳出している⁽³⁾。「hades」の訳はその後、大正訳（1817）で「^{よみ}黄泉」「^{よみ}陰府」、口語訳（1954）「^{よみ}黄泉」「^{よみ}陰府」、新共同訳（1987）「^{よみ}陰府」と変遷する⁽⁴⁾。

本稿では新約聖書から「geenna」「hades」を採り上げ、明治期聖書における「hades」の訳語として用いられた「陰府」「黄泉」「冥途」に焦点をあて、ヘボン訳「^{よみ}黄泉」「^{よみち}冥途」の訳語選択の理由を宗教的・言語的背景及び聖書翻訳の経緯を手がかりとして究明する。

2 死後の世界観

「よみ」「地獄」の概念について、日本人の死後の世界観に多くの影響を与えている神道・仏教及びキリスト教について確認しておく。

2-1 神道における「よみ」

神道は、神社神道、幕末から明治にかけて起きた仏教や儒教などの教えと習合した教派神道、伊勢神宮や吉田神道などの学派神道、民族神道の四種に大きく分類されるが、

本稿では教派神道を除いて共通する概念について検討する。

『神道大辞典』によると「ヨミノクニ」は

【黄泉国・夜見国】ヨモツクニともいふ。人の死後魂の行くべき国、神代の昔伊弉册尊火神を生み、神退りまして黄泉国に住み給ふ。伊弉諾尊これを悲しみ後を慕ひてその国に行かれたが腐敗して浅ましい姿となってをられたので逃げ帰られた。伊弉册尊これを恥ぢ、怨みて豫母都志許賣よもつしこめをして追はしめられたので、諾尊は黄泉比良坂に千引の岩を置いて、これを防がれた。またその平坂の坂本なる桃子もものみを取って待ち撃ち給うたので悉く逃げ返ったと伝ふ。その平坂は出雲の伊賦夜坂いぶやざかであるといふ。また素戔嗚尊性強暴であったので逐はれて母の国たる根の国に入り給ふ。蓋し根国は出雲族の祖国で、これに通ずるには出雲方面よりしたと信ぜられた。天孫民族の祖国高天原を光明ある天上の国と解すべきに對し、闇黒なる地下の国となし、遂に死後の国の思想と混同するに至ったのであろう。⁽⁵⁾

と解説されており、「よみ」という言葉は記紀神話の時代から現れる。『古事記』『日本書紀』には高天原、黄泉国の他、東方にある日の若宮、海の底の国わだつみの宮、根国、常世、豊葦原の中津国（此の世）などの国が出てくる。⁽⁶⁾このうち中心として捉えられているのが、高天原、黄泉、常世の三つの他界と中津国である。常世については、少那彦那命が粟の穂に乗って常世に行ったとあるように、中津国から水平線上の彼方にあるように描かれている。また、高天原についても、天上他界ではなく柳田国男、折口信夫らによる海上他界説もあり、黄泉の世界については、黄泉の国と中津国の境である黄泉比良坂は平らな坂であり地下に入るわけではない、⁽⁷⁾という説もある。垂直的な配置だけでなく水平的な位置づけも考えられるわけである。

なお、神道には「地獄」の概念はなく、初めから死者の国が暗くて穢れた世界だと信じられていた訳ではない。『神道大辞典』に「地獄」「冥途」の項はなく、仏教やキリスト教のように死後に天界に行くことも説いてない。神道では神々の霊や先祖の霊は此の世と断絶されておらず、死後の救いという考え方もない。仏教やキリスト教に比べ、明確な死生観やはっきりとした境界線のない曖昧さが特徴とも言える。

2-2 仏教における「地獄」

仏教の死生観は業を基本としている。釈尊の在世時代から仏滅後百年頃の原始仏教では業は心の問題で欲界、色界、無色界、さらに地獄や餓鬼界なども空間的場所的な世界ではなく、心の状態を述べたものであった。これが部派仏教の時代になると業の果報として具体的な場所として説かれるようになる。⁽⁸⁾

日本において死の思想が急速に浸透したのは平安末期から鎌倉にかけてであり、特に恵心僧都源信が説いた『往生要集』の影響により「地獄」の概念が浸透していった。⁽⁹⁾ 「地獄変」「地獄変相」などと呼ばれる絵画や「地獄草紙」「餓鬼草紙」などの絵巻物を利用した六道説法の盛行により仏教の地獄観が広く民間に知れ渡り、三途の川や賽の河原などの信仰の成立、「奈落の底」「地獄の沙汰」などの表現の流布等、文化や社会に及ぼした影響は多大であった。⁽¹⁰⁾ 『望月仏教大辞典』において「地獄」は四ページに亘り詳細に解説されているが一部を紹介する。⁽¹¹⁾

【地獄】梵語narakaの訳。又はniraka. 巴梨語同じ。又泥羅夜、那梨耶に作る。

地下の牢獄の意。五道の一。六道の一。即ち罪業に由りて感ずる極苦の処所を云ふ。是れ世の牢獄の如く、其の中には戯楽なく、又自ら出づることを得ず、人の欲せざる処なるが故に名づけて地獄となすの意なり。

他に「奈落」「涅槃」などの音写語があり、生前の行いにより天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六道で生死を繰り返す輪廻転生の教えの中で捉えられている。人の住んでいる瞻部洲の下に「等活地獄」「黒繩」「衆合」「叫喚」「大叫喚」「炎熱」「大熱」「無限地獄」と積み木のように縦に重なっており、垂直的な位置づけをしている。これら八熱地獄の他、八寒地獄、副地獄など細部に亘り説明され、神道とは対称的である。「冥途」については、

【冥途】幽冥の界の意。又冥塗、冥土に作り、冥界或は幽塗とも名づく。即ち死後に於ける幽冥の世界を云ふ。(略) 是れ主として地獄等の三途幽冥の処を冥途と名づけたるなり。又冥途には多数の冥官冥吏等ありて人の過罪を治罰する者と信ぜられ、と六道のうち、畜生道、餓鬼道、地獄道の三悪道を含むが、特に地獄を指して用いる場合もある。なお、『望月仏教大辞典』だけでなく『仏教語大辞典』においても「よみ」の項はない。⁽¹²⁾

2-3 キリスト教における「よみ」「地獄」

死は生の終末であり、あらゆる生命現象に1回だけ起るという特色を持ち、人間は地上的存在として死ぬべき定めを持っている。しかし、旧約聖書において死は自然なものではなく、宣告されたものである。人は神のかたちに創造され完全な命が与えられていたが、神の戒めを破ることによって罪を犯したため、死は罪に対する神の罰であり、肉体の死とともに神から離反するという意味の死でもあった。新約聖書では永遠の命を与えるキリストの死により、キリストを受け入れた者には死はすべての終わりではなくなり、全く別の意味を持つようになった。

古代イスラエル人にとって死後の生命は実在の影のようなものであり、「よみ」はこれを集めておく場所であった。旧約聖書で「よみ」に下ることは一般に死と同義語に用いられ、深い闇に覆われ、地の底、滅びの淵などと表現されており、⁽¹³⁾「よみ」では生気の欠けた存在ではあるが、死者が生活し続けられると考えられていた。旧約後期に至って善人と悪人が区別され、正しい者の魂は「よみ」より救い出されると考えられるようになり、神の支配は「よみ」にまで及ぶとされ、この概念が新約に受け継がれた。『新聖書大辞典』では「よみ」について以下のように説明している。

【よみ】（陰府、黄泉）は下界をさすので、地下における死者の住居と考えられた。旧約では悪人の未来の刑罰の場所としては明確な観念をもっていないが、預言書にはそれを示唆する言及も見られないことはない。捕囚後、黙示文学の発達によって「よみ」に関するユダヤ人の観念はしだいに明確になって来た。外典のエノク書には「よみ」についての詳細な描写があって、特に墮落天使のために備えられた場所とされている。新約にもラザロの物語には「よみ」は義人のための祝福の場所と、悪人のための呪詛の場所とが相接してそこにあることを示しているが、他の引用では死者の行くべき場所との観念がそのまま残っており、死者の刑罰の場所としては「ゲヘナ」⁽¹⁴⁾が想定されている。

「よみ」は下界にある死者のための場所で、神を信じない者が罰せられる場所「ゲヘナ（地獄）」と区別されている。

3 聖書翻訳の背景

1859（安政6）年、ヘボンが日本の開国を待って最初の和訳聖書といわれるギュツラフ訳（1837年頃）「約翰福音之伝」を携え渡来し、神奈川県成仏寺において日本語を学びつつS.R.ブラウンとともに聖書翻訳に着手した。1872（明治5）年『新約聖書馬可伝』、『同約翰伝』、1873（明治6）年『同馬太伝』を出版し、時を前後して第一回宣教師会議を横浜のヘボン会堂で開催し、プロテスタント各派による宗派を超えた共同訳業を開始した。1874（明治7）年より翻訳委員社中訳による新約聖書が分冊出版され1879年に完了、1880年『新約全書』が刊行されるに至った。1887年には旧約聖書が訳了し明治訳と言われる聖書が誕生する。以降「大正訳」「口語訳」「新共同訳」と日本聖書協会から刊行される主たる翻訳聖書の基となる聖書である。

3-1 底本及び翻訳規定

訳業にあたり用いられた聖書について井深梶之助は

テーブルの上を開いてある書物はブラオン氏とグリーン氏の前には二三種の希臘原

文の聖書、ヘボン氏の前に英訳の新約注解書、日本人の前には文理や官話やその他の支那翻訳の聖書といふ風であった様に記憶する。(略)何を正本として翻訳すべきといふ問題であった。是は頗る重大な問題ではあるが之に就ては大した議論もなくゼームス王勅定英訳(テツキスタスレセプタス)の原本に依ると定められたやうに承知する。乍然当時知られた丈の最古の原文を参酌した事は申す迄もない。⁽¹⁵⁾

と述べているように、ジェームズ欽定訳(英訳)を参考にギリシャ原典を底本とし、英訳の新約注解書、文理や官話などの漢訳聖書を参酌した。これらの漢訳聖書のうち特に重視したものがブリッジマン・カルバートソン訳(1863年)漢訳聖書であった。⁽¹⁶⁾ 宣教師らが翻訳において何を大前提としたかは次の文から伺うことができる。

亡びゆく国はその滅亡に先だちて先づその国語を亡せり、近くは印度、古くはユダヤ、皆然らざるなし、日本は新興の国なり、大和語は大和民族と共に永存すべし。文の雅俗は別として日本語を以て日本文に訳せざる可らず、漢文体も不可、英訳体も不可なり⁽¹⁷⁾

支那訳に信頼した補佐官には自然と漢文風に流れんとする傾向があった。ブラオン先生は始終その傾向と戦ったことを話されたように記憶する。折角聖書を日本語に翻訳しても只少数の学者文に読めて普通の人民に読めぬやうでは何の益があるかとは先生の屢々繰返した議論であった⁽¹⁸⁾

日本での伝道に生涯を捧げた宣教師たちは、キリスト教信仰の礎となる聖書の流布を第一とし、聖書を大和語で一般庶民に理解できる言葉で和訳することを目的とした。

3-2 「geenna (ゲヘナ)」の訳語

ギリシャ語「geenna」は、旧約聖書の「ヒノムの谷」あるいは「ベン・ヒノムの谷」から出た言葉である。この谷で幼児犠牲の儀式が行われたため罪と恐怖の代名詞となり、その後、廃棄物や動物及び罪人の死体焼却場に当てられた。こうした経緯から自然に地獄の同義語として使用されるに至った。

馬太伝に「geenna」という語は7例存する。ヘボン・ブラウン訳『新約聖書馬太伝』(以下、ヘボン訳という)、翻訳委員社中『新約聖書馬太伝』(以下、社中分冊という)、翻訳委員社中『新約全書』(以下、社中全書という)、翻訳委員が参照したブリッジマン・カルバートソン訳『新約全書』(以下、BC訳という)各書とも「geenna」は「地獄」、ジェームズ欽定訳(以下、欽定訳という)においては「hell」と訳されている。その後、大正訳で「ゲヘナ」と音訳されるが、口語訳、新共同訳では「地獄」と訳される。旧約新約聖書ともに「geenna」は英訳「hell」、和訳「地獄」に定着している。

3-3 「hades (ハデス)」の訳語

「hades」は、下界の神ハイデスからとった言葉とされ、旧約聖書のヘブル語「シェオール」と共通の概念を持つ。これは通常「見えない世界」を指し、死後の世界、肉体的死と裁きの中間状態を指している。

「hades」という言葉は新約聖書全体に10回出てくる。翻訳委員が参照したギリシャ語原書、欽定訳、BC訳に、訳語変化を見るためにモリソン⁽¹⁹⁾訳(1813年)、大正訳、口語訳、新共同訳を加え一覧にすると次のようである。ただし、ヘボン訳は^{マタイ}馬太、^{マルコ}馬可、^{ヨハネ}約翰の三福音書の出版後、社中分冊に移行しているため現存する三福音書から馬太伝のみの比較となる。社中分冊は北英国聖書会社出版のものとする。⁽²⁰⁾

「hades」訳語一覧

	馬太伝 11.23	馬太伝 16.18	路加伝 ^{ルカ} 10.15	路加伝 16.23	使徒行 伝2.27	使徒行 伝2.31	黙示録 1.18	黙示録 6.8	黙示録 20.13	黙示録 20.14
原書	hades	hades	hades	hades	hades	hades	hades	hades	hades	hades
欽定訳	hell	hell	hell	hell	hell	hell	hell	hell	hell	hell
モリソン訳	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄	地獄
B・C訳	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府
ヘボン訳	冥途	黄泉	—	—	—	—	—	—	—	—
社中分冊	陰府	陰府	陰府	地獄	陰府	陰府	陰府	陰府	陰間	よみ
社中全書	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府
大正訳	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	陰府	陰府	陰府	陰府
口語訳	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉	黄泉
新共同訳	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府	陰府

(表1)

注 ヨハネ黙示録は黙示録とする。

欽定訳では「geenna」と同じ「hell」という語が使用されており、モリソン訳はこれを受けて「地獄」と訳出している。一覧には掲載しなかったが、ベッテルハイム訳(1858年)⁽²¹⁾『路加伝』、ゴープル訳(1871年)『馬太福音書』でも「ぢごく」となっている。モリソン訳とともに欽定訳の「hell」の影響を受けたものであると思われる。社中分冊においては路加伝16章23節に「地獄」が用いられている他は「陰間」「よみ」など表記の異なる箇所はあるが、「陰府」が使われている。「陰間」という語は、現在中国において広く読まれている『新旧約聖書』で使用されている「阴间」という語の旧字体である。⁽²²⁾社中分冊の後、一冊本として出版された社中全書ではすべてが「陰府」になっており、BC訳の「陰府」を採用したことがわかる。⁽²³⁾

社中全書において「陰府」という漢字で表記されていた「よみ」が大正訳では黙示録での「陰府」を除き「黄泉」という漢字に替えられた。大正改訳が行われた背景には思想、神学、釈義学の発達による改訳の要求とともに、底本とした欽定訳がRevised Versionに改訳された経緯もある。従って大正改訳ではRVの解釈を参考にしたためその影響を受けたものであるか、あるいは黙示録での「よみ」が死と一組で使われている箇所であるため黙示録だけ区別したものであるかと推測する。1955年に出版された口語訳は当用漢字及びかなづかいの変化により文体をはじめ大幅な改訳が行われ、新約聖書では「hades」は「黄泉」に統一されたが、旧約では「陰府」となっている。これは内容の相違の意識からではなく、改訳委員の間に十分な連絡がついていなかったためである。⁽²⁴⁾1968年、聖書協会世界連盟にローマカトリック教会が参加し、プロテスタントとカトリックが同一の聖書を使用する協議が成立し、日本では1987年に新共同訳聖書が発行された。ここにおいて再び「陰府」という語に戻るのである。カトリックで使用されていた主な聖書フランシスコ会訳では「よみ」とひらがな表記されているので、フランシスコ会訳ではなく明治訳『社中全書』での「陰府」を採択したことになる。⁽²⁵⁾

先述のように、欽定訳では「hades」も「geenna」も「hell」と英訳されていたが、Revised Version（英国改定訳1881）以降「hades」の訳として「hell」を用いるのを止め、原語「hades」のまま使用するようになる。日本においても口語訳出版の後、日本聖書刊行会より出版された新改訳（1965年）では「hades」「geenna」は「ハデス」「ゲヘナ」と音訳されている。ただし、旧約については「よみ」とひらがな表記されており、あとがきから原典にできるだけ忠実であろうとする訳業の困難さが窺える。

新約聖書で〈ハデス〉〈ゲヘナ〉と訳出されているのは、それぞれ「死者が終末のさばきを待つ間の中間状態で置かれる所」「神の究極のさばきにより、罪人が入れられる苦しみ場所」をさすが、適切な訳語がないために音訳にとどめたのである。しかし、旧約聖書では、新約の〈ハデス〉に対応する〈シェオル〉を〈よみ〉と訳した。これらの訳語の統一については、さらに検討が必要であろう。⁽²⁶⁾

4 明治期聖書における「hades」の訳語

ヘボン訳、社中分冊、社中全書については欽定訳の「hell」を採択しなかったことは明らかである。社中分冊、社中全書はBC訳「陰府」に倣い「陰府」という漢字を使用した。しかし、ヘボンは漢訳の「陰府」ではなく「冥途」「黄泉」という言葉を用いている。

4-1 辞書における「よみ」「地獄」

明治期聖書にみられる「陰府」「黄泉」「冥途」「地獄」について、当時の日本において「よみ」「地獄」はどのように捉えられていたのかをルビに用いられた「よみぢ」を加え辞書、辞典類から検証する。調査対象とする辞書は『言海』『ことばのその』『ことばのはやし』『漢英対照いろは辞典』『日本大辞書』『帝国大辞典』『ことばの泉』『大字典』『字源』『広辞苑』『大漢和辞典』とする。⁽²⁷⁾

4-1-1 「地獄」

『言海』『ことばの泉』では「地獄」は以下のように冥界の一つとして説明され、『ことばの泉』では転義の項が加えられている。他の『大字典』『字源』など大正時代にかけての辞書でも同じく仏教の教えに添い正確に把握されている。

『言海』

[地下ノ獄ノ義]①仏氏ノ説ニ、冥土ナル六界ノ一、亡者ノ呵責ヲ受クル処。等活、黒繩、合曾、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻、ノ八大地獄アリト云。又、冥府。梵語ニ奈落。

『ことばの泉』

①仏教の語。冥土六界の一。亡者の苛責を受くるところ。冥府。奈落。

②苛責を受くるところ。難義の場所。獄屋の如きところ。俗語。

昭和になると、宗教語としてキリスト教での語義が立項されるようになる。

『広辞苑初版』

②キリスト教思想では、救われない魂が永劫の罰責をうける幽府（インフェルノ）と、呵責によって浄罪され昇天を許されうる煉獄とがある。

ただし、ここで説明されている「煉獄」はカトリック独自の教えであり、本稿で扱う明治期聖書に「煉獄」という言葉は使われていない。

4-1-2 「陰府」

『大漢和辞典』には「陰府」「黄泉」の見出しがあり、

【陰府】インブ 地獄の閻魔王の居る所。よみぢ。冥府。冥土。

【黄泉】コウセン①地下の泉。②死者のゆく所。よみぢ。冥土。③あのよ。未来。

「黄泉」^{コウセン}では第二の語義に「死者のゆく所」と書かれ、人や物の集る所という語意を持つ「府」が使われている「陰府」の方が冥界を表すイメージが強いため漢訳において「陰府」が用いられたと考えられる。他に「陰府」という見出し語があるのは『大字典』だけであり「インブ」と読ませている。

【陰府】インブ地獄の閻魔王の居る所。

なお、『広辞苑』においても初版から現行の五版に至るまで「陰府」の見出しはない。

「陰府」は明治期和訳聖書により他の聖書術語と共に日本に紹介され、大正訳（旧約並びに黙示録）、口語訳（旧約）と使用され続け、新共同訳に受け継がれるものの大衆に浸透することなく現在に至っている。

4-1-3 「黄泉」

「黄泉」はすべての辞書に掲載されている。主なものを示すと次のようである。

『言海』

【よみ】[黄泉][夜見ノ義ト云]人死シテ後ニ、魂ノ行クベキ処。ヨミノクニ。モヨツクニ。根国。ヨミヂ。九泉。九原。

『漢英対照いろは辞典』

【よみ】黄泉、よもつくに、冥府、陰府（死人の行く処）Hades, region of the dead.

『字源』

【黄泉】コウセン①地下のいづみ。②死者のゆく所、よみぢ、冥土。

各辞書ともに「死者の行く所」「死者の魂の行く所」と解説されているが、聖書和訳に携わった高橋五郎編『漢英対照いろは辞典』には「陰府」という語が使われている。『大字典』『字源』では漢和辞典に倣い第一の語義として「地下の泉」を挙げている。日本文化の厚い基層をなす仏教の理解を深めるために、仏教語に限らず関連する項目を収録した『岩波仏教辞典第二版』では次のように説明している。

【黄泉】地下にある死者（霊）の住む所。黄泉国（泉国）よみのくに・よもつくに・よみつくにともいう。記紀神話の宇宙観における天上・地上・地下の3段階区分の最下部。記紀では、伊邪那岐神が妻神を追って黄泉を尋ね、火をともして見たところ、妻神の身体には蛆がわき、各所に雷（蛇）が蟠踞していたと屍体腐敗のさまを記しており、暗くて穢れに充ち満ちたところとイメージされる。古墳の埋葬状態の印象から生じた観念と見る説もある。なお、後世は仏教における冥途と習合し、ほぼ同義に用いられた。⁽²⁸⁾

ここでは埋葬状態から「よみ」に暗いイメージが定着した理由を紹介しているが、江戸時代の国学者である平田篤胤は、古事記による天・地・泉の三大考について詳細に図解をし、地の底に一つの物の芽生て泉国^{メグミナリ}となったと分析し、天の光を受けない故に成り始より闇かったため夜見国^{ヨミノ}という⁽²⁹⁾と述べる。また、「夜見」に「黄泉」の字をあてたため混謬されたという説もあるように、「よみ」に地下の世界、硫黄の涌く地獄の一つである「黄泉（コウセン）」という文字をあてた事なども、神仏習合による死後の三悪道や地獄を連想させる「冥途」と混同されていった要因の一つであると推測する。

4-1-4 「冥途」「よみち」

各辞書をみると漢字の統一はなく、聖書用語に詳しい『漢英対照いろは辞典』ではヘボン訳で用いられた「冥途」がどちらの項にも現れている。

『言海』

【めいど】[冥土]仏説ニ、亡者ノ往キテ居ル処、地下ニアリト云フ、ヨミヂ。冥府。

【よみち】[黄泉]黄泉へ行ク路。

『ことばのはやし』

【めいど】[冥土]ひとの、しにてゆくところ。

【よみち】黄泉。よみのみち。また、よみにおなじ。

『漢英対照いろは辞典』

【めいど】[冥途]暗き道。黄泉。陰府。Hades。

【よみち】黄泉路、冥途、よみへゆくみち：又よみ、Road to Hades ; Hades
itself

『ことばの泉』

【めいど】[冥途]仏説にて死人の魂の行くといふ土地。よみち。

【よみち】[黄泉]よみにおなじ。古語。

「よみち」に「黄泉」「黄泉路」、「めいど」に「冥土」「冥途」の字があり、場所と道の両方の語意が連想されることにより「めいど」と「よみち」は4-1-3で述べた「黄泉」と「冥途」同様に同義語として捉えられていることがわかる。つまり、「めいど」「よみ」「よみち」について明確な語義の区別はなく、充当される漢字にも「黄泉」「黄泉路」「冥土」「冥途」など幾通りもあったことがわかる。

4-2 ヘボン訳における「冥途」「黄泉」

ヘボンは聖書和訳に先立ち、日本語研究のために『和英語林集成』を刊行しているが、編集に当たっては、メドハーストの語彙集と日葡辞書を参考にしたと初版の序文に述べている。⁽³⁰⁾海老澤有道は日葡辞書を参考にしたことについて疑問を指摘したが、⁽³¹⁾これを受けて鈴木英夫氏は「ヘボンと辞書と聖書和訳」において調査の結果、日葡辞書を参照していたと考察し、⁽³²⁾飛田良文氏も日葡辞書を参考としたと述べている。日葡辞書に「よみ」の項はなく、関連する言葉として「Yomigi」「Meido」を見つけることができる。⁽³³⁾

【Yomigi】人が死んでから通っていく道。

【Meido】 Curaqi michi(冥き途)すなわちXixite yuqu michi.死後人が辿り行く道。Meidoni vomomuku.来世で人がインヘルノ (inferno地獄) または、その他

の所へ行く。

日葡辞書においては「Yomigi」「Meido」は場所を指すのではなくそこへ行く道として捉えられているが、ヘボン『和英語林集成初版』で次のように説明している。

【YOMI】ヨミ、黄泉, The place of departed spirits, hades of the Sintoo.
—no kuni, idem.

【MEI-DO】メイド, 冥途, Hades, the invisible world, region of the dead. (Bud.)—
ni yuku, to die, to go to hades. Syn. YOMIJI

【YOMIJI】ヨミヂ, 黄泉路, A road in Hades, by which, the souls of the dead, crossing, the *Shide* mountain and the *Sandz* river, travel to reach *Yemma sho*; the place of judgment. From this place two roads branch off, one to *Gokuraku*, (paradise), the other to *Jigoku*, (hell). Before crossing the river they are stripped of their clothes by an old woman, called *Sandz gawa no obasan*. Budd.

「黄泉」は神道における「hades」、「冥途」は仏教において見えない隠れた世界、死者の支配する領域、「黄泉路」は仏教語で「Hades」における道、それにより死者の魂はシデ山と三途川を越えて裁きの場所、閻魔庁に到着する。ここから極楽への道と地獄への道に枝分かれする。川を越える前に三途川のお婆さんと呼ばれる老婆によって衣服を剥ぎ取られる、と「黄泉」「冥途」「黄泉路」を日葡辞書や当時の国語辞書とは異なり明確に区別して把握している。なお、『聖書辞典』においてヘボンは「よみ」を以下の⁽³⁴⁾ように解説している。

【ヂゴク】(地獄)(略)是即ち蛆虫^{うじつき}盡ず火の消ざる処なり、イエスも亦是ゲヘンナと云言を以て地獄と其永遠の苦痛を示し給へり、神は罪を犯したる^{てんのつかひ}天使を地獄に投入^{なげいれ}たまへり、又大なる^{おほい}審判の^{さばき}日^{のろは}詛るゝものゝ無窮^{かぎりなき}の^{いる}刑罰に入とは地獄に入との意味なり、又太13-4にある^{ろのひ}炉火 黙19-20にある^{もゆ}燃る火の池、又同21-14.15にある^{おなじく}火と^{いわう}硫黄の池とは地獄を指して云言なり

【ヨミ】(黄泉)(略)死人の^{たましひ}靈魂の来り集まるところなり、旧約の^{とき}時代にヘブル人はシオルに^{つひ}就て^{つまびらか}詳に知ことなく之を以て^{ちのした}地下にある^{まつくら}広く且深き暗黒なる場所にして是^こ処に^こ門と関と谷あり、又死人は善悪にかゝはらず^{とも}皆偕に集る処なりと思へり、されど又シオルの中に於て義人と悪人との間に懸隔^{へだて}ありき、新約の時代にはキリスト^{あきらか}顕れて死を滅ぼし^{いのち}生命と^{くちぎる}不朽^{あきらか}ことゝを明白^しになしたまひし後ヘデスは死たる人の^{たましひ}靈魂が世の^{すえのひ}末日^{ふたたびきた}キリスト^{よみかへら}再来りて死者を復活しめたまふ時まで止まる処なりとの意味なり、

聖書において「よみ」は死から最後の審判、復活までの期間だけ死者を受け入れる中立的な場所であるのに対し、「地獄」は最後の審判の後に神を信じない者が罰される場所である。「蛆尽きず火の消えざる処」「火と硫黄の池」とは仏教で言う「地獄」の様相と重なり「geenna」に「地獄」を用いたのは頷ける。「よみ」については欽定訳「地獄」、BC訳「陰府」を捨て日本で使用されていた「黄泉」「冥途」の漢字に「よみ」「よみぢ」と振り仮名をした。「黄泉」と「冥途」を使い分けた理由として馬太傳16章18節では

われまた汝につげん汝はペテロなり わが^{しうくわい}集會をこの^{いし}石のうへにたつべし ^{よみ}黄泉の^{もん}門はこれにうつべからず

と、「hades」は教会の敵、サタンの本拠地として示されており、『聖書辞典』においてヘボンが「深き^{まつくら}暗黒なる場所にして是處^{こゝ}に門と関と谷あり」と解説した「黄泉」という語を用い、馬太伝11章23節では、

^{てん}天にあげられたるカペナオムよ汝^{よみぢ}冥途におとさるべし いかにとなれば汝になしたるふしぎのわざをソドマになせしならば今日^{けふ}までたもつべきものを

と、天と地と「よみ」の三層の世界像を連想させる、旧約の地下の観念が見える箇所であり、『和英語林集成』「冥途」の項で「the invisible world, region of the dead.」（目に見えない隠れた世界、死者の層）と解釈した「冥途」の字を用い、「よみぢ」と和訓させたと推測する。

5 おわりに

日本には古来から存する「よみ」という死後の概念があり、そこに仏教の「地獄」のイメージが重なっていった。埋葬状態から起る暗く穢れた印象、往生要集など仏教で説かれる強烈な地獄の恐怖感、畜生道・餓鬼道・地獄道を指す冥途、「よみ」に「黄泉」という漢字を充てたことによる地獄の連想等が要因として考えられる。その結果、語義にも変化が生じ明治期国語辞書においては「黄泉」「黄泉路」「冥途」「冥土」が同義語として扱われ、読み方も定まっておらず「よみ」「よみぢ」「めいど」などと混同されて用いられていた。なお、「地獄」については仏教語として仏説に従い定着していた。

聖書の翻訳に当たり底本となったギリシャ語原書の「geenna」「hades」は参酌した欽定訳ではどちらも「hell」、漢語聖書モリソン訳は「地獄」、BC訳では「地獄」「陰府」と訳出されている。日本において刊行されたヘボン訳では「地獄」「^{よみ}黄泉」「^{よみぢ}冥途」、社中分冊で「地獄」「^{よみ}陰府」、社中全書で「地獄」「^{よみ}陰府」となっており、社中分冊、社中全書では「hades」の訳語をBC訳に倣ったことが確認された。

しかし、ヘボン訳聖書ではBC訳「陰府」は用いておらず、「地獄」についてもBC訳

「地獄」に倣ったと考えるより、日本における仏教語「地獄」の概念が「geenna」と重なっていたからと見るほうが自然である。「よみ」については欽定訳、漢訳の重訳を避け、原典に忠実に且日本で一般に使われていた「黄泉」「冥途」という漢字に「よみ」「よみぢ」と和訓をもって訳語を選んだ。「黄泉」「冥途」「黄泉路」の各語について明確に区別把握した上で、日本における宗教的言語的背景を考慮し、漢訳による威厳よりもわかり易さに重点をおいた選択であったことが判明した。あらゆる階層の日本人が読んで理解できる聖書を目指した翻訳の特徴が顕れていると考察する。

<注記>

本稿ではギリシャ文字の音写記号を『旧約新約聖書語句大辞典』1959(初版)/1972(今回使用の版) 教文館に従い採用した。

- 1 『新約全書』1880/1996翻訳委員社中訳 ゆまに書房 馬太伝3:2、5:29、11:23
- 2 『摩太福音書』1871/1999ジョナサン・ゴープル訳 ゆまに書房 摩太11:23、16:18
- 3 『新約聖書馬太傳』1873/1996 J.C.ヘボン訳 ゆまに書房 馬太11:23、16:18
- 4 『旧約聖書』1817/1973『聖書』1954/1969『聖書新共同訳』1987/2002 日本聖書協会
- 5 『神道大辞典』1937/1996下中彌三郎編 臨川書店p1434-1435
- 6 『古事記 日本思想大系1』1982石母田正他校注 岩波書店
- 7 上田賢治1985「神道における死後の世界」『世界の諸宗教における死後の世界』宗教真理出版p107-p129
- 8 水野弘元1985「仏教における死後の世界」『世界の諸宗教における死後の世界』宗教真理出版p133-p160
- 9 『源信 日本思想大系6』1974石田瑞麿校注 岩波書店
- 10 山折哲雄1995『日本宗教文化の構造と祖型』青土社p92-125
- 11 『望月仏教大辞典』1933/1974塚本善隆編 世界聖典刊行協会p3574-3578、p4858
- 12 『仏教語大辞典』1981/1991中村元 東京書籍
- 13 『旧約聖書』創世記37:35、申命記32:22、ヨブ記26:6、日本聖書協会
- 14 『新聖書大辞典』1971馬場嘉市編 キリスト新聞社p1473
- 15 井深樫之助「新約聖書の日本訳について」『福音新報』第1088号1930年5月5日記事
- 16 川島二郎1993「初期の日本語聖書と中国語聖書」『月刊しにか』11月号
- 17 『植村正久と其の時代 第四巻』1938/1966佐渡巨編 教文館p176
- 18 井深樫之助「新約聖書の日本訳について」『福音新報』第1088号1930年5月5日記事
- 19 『新遺詔書 I 馬竇書他』1813/1999ロバート・モリソン訳 ゆまに書房
- 20 『新約聖書馬太伝』1877、『同路加伝』1876、『同使徒行伝』1877、『同約翰黙示録』1880翻訳委員社中訳 北英国聖書会社

- 21 『路加伝福音書』 1873/1999B・J・ベッテルハイム訳 ゆまに書房 路加10:15、16:23
- 22 『新旧約全書』 1994中国基督教協会 馬太11:23
- 23 『新約全書』 1863/1999E・C・ブリッジマン、M・Sカルバートソン訳 ゆまに書房
- 24 『新聖書大辞典』 1971馬場嘉市編 キリスト新聞社p1473
- 25 『新約聖書』 1979/1986フランシスコ会聖書研究所訳 中央出版 使徒行録2:27
- 26 『聖書』 1970新改訳聖書刊行会訳 日本聖書刊行会
- 27 『言海』 1889-91/1998大槻文彦編 大空社、『ことばのその』 1885/1999近藤真琴編 大空社、『大字典』 1917上田万年他編 啓成社、『日本大辞書』 1892-93/1999山田美妙編 大空社、『ことばのはやし』 1888/1999物集高見編 大空社、『漢英対照いろは辞典』 1888/1999高橋五郎編 大空社、『ことばの泉』 1898落合直文編 大倉書房、『字源』 1923簡野道明編 角川書店、『広辞苑』 初版1955－第五版1998新村出編 岩波書店、『大漢和辞典』 1959諸橋轍次郎編 大修館
- 28 『岩波仏教辞典第二版』 1989/2002中村元他編 岩波書店p1032
- 29 『平田篤胤 日本思想大系50』 1973田原嗣郎他校注 岩波書店p25
- 30 『ヘボン著和英語林集成』 1867/2000飛田良文他編 港の人 序文
- 31 海老澤有道1989『日本の聖書 聖書和訳の歴史』 講談社p222
- 32 鈴木英夫2003「ヘボンと辞書と聖書和訳」『東京大学国語国文79』 p22－37
- 33 『邦訳日葡辞書』 1980土井忠生他編 勉誠社
- 34 『聖書辞典』 1926ヘボン博士、山本秀煌編 聚芳閣

<参考文献>

- 『新聖書辞典』 1985/1993泉田昭他編 いのちのことば社
- 『聖書思想事典』 1973X.レオン デュフル 三省堂
- 『キリスト教大事典』 1963/1968日本基督教協議会文書事業部 教文館
- 『旧約新約聖書大事典』 1989聖書大事典編集委員会 教文館
- 『Interlinear Greek-English New Testament KIG JAMES VERSION』 1897 BakerBooks
- 岩隈直1971/1996『新約ギリシャ語辞典』 山本書店
- 定方晟1987『仏教にみる世界観』 第三文明社
- 菅原信海1996『日本思想と神仏習合』 春秋社
- 鈴木範久2000「聖書の日本語訳－略史と問題」『聖書と日本人』 大明堂
- 田川健三1997『書物としての新約聖書』 勁草書房
- 矢崎健一1972「中国語聖書翻訳小史」『聖書翻訳研究』 日本聖書協会
- 柳田国男1978/1988『海上の道』 岩波書店